三瀟山翁

至根すこ―拵ふおもて三社祭　几圭

青　啄みそ　く宮独　歌立　雅人

大般若捺そ　く　て吹　重北川　五姑

多角石寺　女　笑の倫そ行　几圭

活々中へ　そ　あそぶ深くそ　雅人

書や高　ん五月雨お廉　五姑

寄席そ　お海そいやーん　几圭

口上書の　そ含そ　繕　雅人

中日を高　うし後よ月独友　五姑

葦ゃ有ッそ　尾敲やも　几圭

此秋季を江の　女中出こ　雅人

敲―かけるや男　そ　五姑

ぬすむ気毎お抱き　久しぶり　几圭

京乃深へさそら　絹うく　雅人

蛙吟流水を隔つる橋の時宜　五姫

楽かけや吐き捨て言　原　八圭

老僧ふと表　疎　まとけて　雅人

暗せく　おもひ心を我當ん　今

古云我川を引くその日　八圭

吟ぐ午　膚ふすべて板敷　五姫

稲むらを　奥の酔えが　八圭

新人ふと話かけて更ける　今

噎せ眼鏡志はらく　触く　雅人

ふ内やまいの　鞠　五姫

小竹葉むらぶりて　八圭

墜馬整ふて　雅人

大口袴やれハせぬ下袴も　五姫

と胡坐　北星を棒ふ　八圭

ウ

露久方宵中あふき照て欅　雅人

この下やすき八頼多牡笠　五始

風乃はしまり不もるさ也　几圭

竜大窓　焼酎砧人　雅人

大ろの種子八町宿三里　五始

まいく〳〵と陽えかく状　全

人純ん花ふくしてハ叶ましく　雅人

限て捜ろう下駄　几圭

加賀高平　翔鳥蕃

栄えよや言の葉草かきをきし　貞二

新綾軒

ふしぶしろ子葛硯水風狄

三射園

柚廣め机の　麿山

全

新白菊先　机の硯の箱　千風

笑ひ笑ひ雨の日ともに雪の松　祖臺

月の名の師走をふるまり初　牙酔

山るうしてる重ろく海原ふ…
ふみとまふふきる海ふ長くうる世方
雅ふ門生年ふ空むふ月ふ夢妙
地後五始丈ふ舊業判ふ列ふ
句ふもふ彼書種ふもちて世習ふ城
陳ふ以當時元才の此珠をあつ
もるふ亭も牙指の動めふ意て
一句の意まを性探ふ加ふ人や
ふの序ふ五始新入ふ用ふを
發祝するの言葉ふ事

元をふ立ふ晴くふ帯の志ふ稼ふ　僧　文水

やゝふるまふ於ふるふ雲　五始

かるふふおふ記ふをふかせて　羅人

歌仙

日中の埜ふ志ふさやまふ風　桃唐

ふふ蛙ふ地ふ子はふ砌川の西　波光

楼ふふ春ふ五ふ人ふをふくまれて　今

世ふおふ年ふ今一ふ年ふん　桃唐

いり月ふ蕎て降雪のゆふれ　今

鏡の筋るまふ姓雪ふ　波光

大うの森ゑ神祇を司どる　波光

未世てるかし――ゑ陳百喜ふ　桃唐

怨詛しや仇の乃うみの身嘸

そや剃深き譬世のはゑ　波光

紫陽花ゑまき鈴ゐ百仇ゆう

敦下はまき敦和の胡戸出　桃唐

雄ゑは不の声世云ふまう記　波光

三世の――ゑ月の中秋

とお――我れが生まうてれ支ゑ　桃唐

服ゑおふ詛つ百新倉の瘦　波光

筆乃右り参ゑ花のてはル　桃唐

二

禁地新ゑ蛙嘉み　〃

長刀を先ホ立ハ七宋ゑ　波光

夜男ふハ侍ゐる　〃

お想雄至ホ知て行思ル　〃

ゑ角ホゑ詛夕ア子ゑき　桃唐

まちの紀市の藤子孫雅墨衣　桃亭

裏門出まく暗蓑り婚　波光

名人へ像ホ徒てハ籠をヒ、

世間へ知れぬ月の酒　桃亭

集半ば並て等の面洗し、

服をヒろう秋雅山雅、

青雲ち時ヒく雨もなく雲の雷　波光

里分の蛍ち消へ、

ハ出て百石ヒろハ代ろう　桃亭

又ぶホ思ホ面ヒ黄葉　波光

黙ヒホ跡一かヒる大梅雅雨　桃亭

ねヒへ西ヒ代ハ町人雅緑、

名ヒホん花の籠雅乃筆正一　波光

鳴里うくおのうい籠く　雅筆

歌仙

ちる梅や雪の中なる土へ戻　　蕉笠
　あるじあるじに土をかる笠　　五竹
乳もまるも異室の寒さ哉　　羅人
　一束ゐまく定まりまり　　楚人
うき雲を雨に月なれなれしき水　　全
　同小やかるのハ名のみの草　　蕉笠

落葉をも家苞にする秋暮　　五竹
　影さへ淋しき井の深浚　　楚人
すをくやたゞこゝろぼそき虫の声　　蕉笠
　破イを葺イかぬ苦イ書院　　五竹
仕かへしかゝりお抔の新ぶるし　　楚人
　毎うす縞を初着うすゆる　　蕉笠
富ちかき処塀下をつまかぬ油簗　　五竹
　小紋の仙台上の武士　　楚人

熱海より江ノ島へ
鐘の音 ふるさとの暗を
老翁を見うねる松を
雪ち雀 のあるだかりなく
すかやうる傘小女のれ給ふ
実ハ幸ハ女ぶと知れど愚鈍
孤火孤舟かすむ春ふ明ちらき
寺の祝ひ大般若

松人
撒草
五始
松人
撒草
五始
今
撒草

三歌め精進あて生きかへる
春 奥だちの花ハ名言
書生部屋のむさくるしく
後ひまゐて又立落する
糸よりまわりまわりまわり
かんてらはつくりを 始
やはらぎ後の月 独ふるめハ縁の袴
着物着れもおめ 撒草

今
五始
松人
今
撒草
松人
五始
撒草

何ものおりしも相愛ぬり　五拾

名を人の名よりも唯一　拾人

わりきおき相手をおもふ心の糸　撫草

時知ちごの笑ひ二タ増す　五拾

きくのえハ富ふきかさも記おき　拾人

ちよおきませて芳名録書おさめ　就業

歌仙

出雲路のおとうふ屋にて

日永哉ま山引よせて笙和

碧苔のうゆる雪き川　羅人

藤の蟹穴中ふ極こみて　今

十ヲ竹一ツ毛を穀指てゐる　笙和

月ちおきき笹乃雪ふ松　今

薄きて峰を猶ふ仰ぐ　羅人

注き手祝辛く　村の口　雑人

物と　物と　八法　筆和

寒寒入合点て　側よ森入　今

雑つ　雀　雑人

白繋ぶを　油と　蚕雪　今

湯要き　今

楽りうぼる　詠と　山梅　筆和

人　写身ふと　雄廿廣指　今

廣儀の　油を　山寺の性家　雑人

月を　砕を　筆永

出合セ　指を　雑人

筆山て　い詠くの業　筆和

詠て八天　意がちるほ伝　今

給仕乃　被多　雑人

寒の一寒山千ぶ　今

加茂多幸　取多　指　筆永

秋立ふ今の心地有明は　筆和

擬九年母　雞樓

冬至　　雁人

ゆく年ぞ八十路も近う成ぬる　今

新物の習せもなくまゝく　筆和

雨乃庵の話をかゝん文　雁人

淨瑠璃数八月廿日　今

芸て出る秋哉　秋口　筆和

明ぼのゝ雪に俤ふそひ　今

当去ゝる田子　雁一すぢ　雁人

うめく奴股へきれ半度実　今

鳥帽子を紙を白法ら時宜　筆和

ふまゝ胡蝶の雁公の陰　今

財布とい一ぱ　春を祖！　雁人

歌仙

ウ

年降の雪ちいさく尺通され　和流
葉を落る地は凡の青　几圭
仲人へ雪つる丈乃耳を出し　全
屠つかさ称　歌き入ふり　和流
ざうふくも盃をハまぐ歌て添し　杜口
定日十日朝　十一日　明　全
指うちふふきく鳴る峰の月　和流
上俊ひるく乞ふ立舟　几圭

茶壱壺 代 弐百文
這子を あおふ 茸子の玉水 百千
茶のみ 茶わく 和漢の仮名まで 壱冊 代 弐百文
小鮎の 匂ひのごとく 小刀 百千
二
書純日記 全部 壱冊 代 弐百文
蜜柑 皮ひかる 三人う汁 和流
掛物 小幅 八重ざくら 小脇差 九尺
竜吐水 破うけ 風 百千

一斗缶 弐個 代 弐百文
赤い 袋で 実用もの 九尺
月琴 壱面 代 弐百文
味噌こし 雪の 帆柱 九尺
峰さとは 西 不動 一丁の 竿 百千
河内よ 鍬 八条宮 八重やむ 九尺
私むとは 見 和流
祝儀 袋 よって 居る 小脇差

全

死るとき大工悪しむ墓をの　百千

辞世とて詠そのちハ筆を　杜口

早敲ていよく雑煮盛りの称　和流

ひよろきん武て云分無止　百千

丸山ハ茶臼ト下駄の光り　几董

称と漸て画ト経むる雨　杜口

書名並俳名略ス

二代目の

裏

笠や惜まる禅弟歩裏ニ立　百千

雪

此国手未進者等勿除者　和流

笈葉

さま〴〵歌書南一斗笈埜哉　梅翼

加賀　章平

馬ゐ　白川堂

寒中

雪　泉牙

妾薄命　素影

帆　雪

後の月

まめ　雪

山吹や　曾嵐

十三夜

七　雪

ふ　雪

吹雪

雪　雪

鳴うか　當水

代小清ふる梅乃ふりひろる　吟志
ふるしる雪のちる枝の後まで　杜水

賀

雲井、そ人相うきやこ店の春　瓊宝
時鳥ふる流まも春き哉　東李

賀立春

年筆の筆も清き筆始　拝月泉
青角

世ハ旬ふ雪ふを梅の手梅哉　圭舟

霜来津

猿しやか此雪ふ東ふ　孟水書　今
喜秋の申越ふや清枝川　公

い張ごくの口利ちふん山梅　慶山

栗良

若き松よ神や人ふたつ慶
酒星多き夜雑煮や祝ひ妻
酒るとは知るや秋の狐を秋扶風
ふるき扇雪舟ん到子春
土用
汲ムまふもを知るを水合 酒 秋
山水風
新しき板の名前や窓乃月

中秋
扇置て業の出来栄も報ふ月の光 信 指月

雪車国杜を詞書や
ふる雪一を祝して

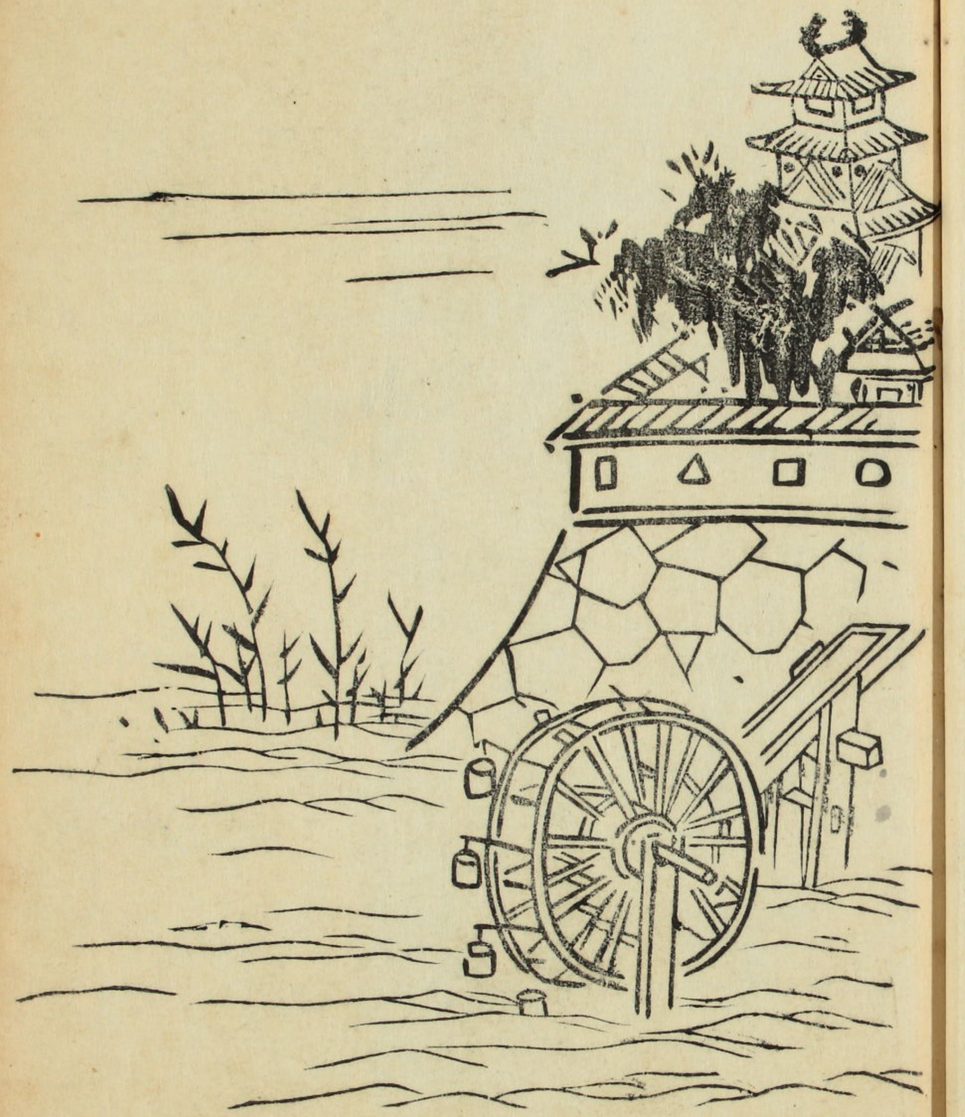
ふるまちの笑ひ顔也雪花弦雪 数乃舎 操爺

土始雅楽会の事のやうな
お祭りを見して

京慶一机のいろ海を弦雪 百蟻斎 梅水

賀

世ふるく
今生まれ
名ふさく
名ゆむ
俤まや
標はゝ



四季

梅ちくや俊乗坊も香の炎　等秋　香猶庵

雪まれや初音のほととぎす　〃　〃

月おぼろ八百日ひとよの月　〃　〃

照る日かおよる富士のしらゆき　〃　〃

万像斐羅詣友ヲ二ヲ紙

初雪やうれしき友を元　長生庵　仙鶴

歌仙

浪花
嘯山岡

云名月を詰荒の茄子哉　多鹿
かざす扇ハ眉はく除房　五明
夢結ハ素袍の紐へ入て　沖夏
不自由なる玉ふ寺繋ぎ石　梅隆
身乃置所我家ハ楽し　如葉
強て居ま鶯追ふ　多鹿

ウ
衣手の里ま秋ふ川明芙蓉の雲　梅隆
雪ハ仲宵ふしくめ汁　多麻
新相撲ハ投ふきふる日傘　多鹿
芝居一世ふ房やふ雨も　如葉
提灯を割ル新ふて笑ふ声　多麻
借て着ふ紙子ふ着川の砂利　沖夏
着くぬき暗く遠ゝば本降　全
来ふ筍ふーをの世間を　梅隆

狂杜牙すゝどく月乃さえ吟り　多麻
百色集め机の事も忘　加葉
硯を雲手仙家も出る霊　多飄
此時ゝ言葉の途切る後　神夏
於十日一日ゝ降くおもひき　加葉
雑な筆跡なるを江湖の山　林隆
情忍の絢を作き一張家雨　神夏
百万遍よ変る物をひ　久飄

逢ゆをうハ雑なるる吐ミ好　多麻
おゝや捨くハと払ぐる　凡
でさら筋のまおふせよふ玉を　全
まあ集孫ミ高歩ら也繋切　梅隆
名乃かを褄の簪をつけ　多飄
名氣くゝ一口小清に　加葉
引ぐの言語を志ご新妙月　梅隆
こだんたハやび寝所のこ地　神夏
め葉

八束穂冬の新田守の狐裕　子規
湯へ筆こむこと一時ハ　沖夏
笠の時雨多くと吟じし　如葉
小藪出しそめてやる雀帳　子庚
花稗と毎のはまを玉川　梅路
営林舗水香表石石　子規

歌仙

武江吉原よまあき

おとそ手ぬぐひやをかしかりし　白羽
赤頭巾の入リー明星　五姑
琴笛のまぼろし居建替て　周禾
力ぐるまばふいりまき人　魚洞
朝酒自漉の虫も市へ出　茶風
稲の名ハ几二十八宿　執筆

十南奇

さてはお芳姐風ホテルの名を聞き　魚河
四おどり待ちの称呼高尾亮　白羽
お供とおすがらく参附湯　茶凡
大立ら笑ふ銘酒乃将　周禾
上るとをふくて二階へ蜜漬け　白羽
泊り津もの説法の声　魚河
胸の十三数八東本願寺　仝
日文姓名書中　茶凡

ごうふくも母の指し扇の髪　周禾
蘭(ママ)楼へ油揚さまた萩張　白羽
海ちの松山お家騒動の花ん　茶凡
糀買さして来て雛を飾りお　周禾
春乃ふ錦帰る富士力添へ　白羽
賭よ猪ち鹿ち投銭抑合　魚河
井戸町妾宅と見ちう　周禾
名を替て来ーさと指　茶凡

いつ尓ん永哉　佛ふ思ふ智　魚河

栄教ふて　ゑ知ふ尼かんて　白羽

竜蛾物を　浅也ゑ称　茶凡

耳根掃　深これハ伽ゐ　周禾

孤狸雪や月を宵ケて　化　白羽

書子哉ゐ　ゐる芭蕉ふの伝　茶凡

夕雪よ更ゐ　ゐこゐ切蓋の灯　周禾

まゞ各を身　身やうちふ乱ゑ　魚河

砂人を　哉よ　和る足の裏　茶凡

指ニ突ゐ　ゐこゐ足ゐる　勅雪　白羽

順て志ゐア　ゐ流して落を画　魚河

水製絞ゐテ　ゑ乃影　徐　茶凡

笠ゐ姓　衣ゑ　楼の家名ゑ　白羽

聖ふゐ　褌を脱一　青凡　周禾

歌仙

歌小味も身知初ふゆ羽織　東江閣　樊川
雪つもれよるとゝ水　玉姫
笹竹は誓れハ蔦のんもて　五川
おとろかけなくも仮名ふ添ふ宗　秣沖
月独入ぬるも則うつハもの　魚倉
春年変りし笹の下萌　芦笙

ウ
切る指輪もきくくれ　麒卜
猶てをちいさき指の爪　董下
ちと私も曽事更人をもとハ是　青義
逃ルあがるみる妹がさみれ　芝山
一日枕落ふ枕るかきみるる　秣筆
どれ中笑るハ乳のつき時　五川
指金の内おぶ塔も遠こず　秣沖
指を垣離の裾　魚倉

多比朝警乃和尓小作為て　芦笙
鼓錘打為てなるまで　鼬卜
花豊年をかくまて　九祿　薑下
安産大名　毛栄かまー　耳義
俄人乃ねるまはこぬまの　芝山
詰出ーこの長服く今尹　雅沖
顧客の小紫地へ服れて　玉川
舞ふ義ずぬなる詐凡　芦笙

檀尾打上小手に伊勢大神宮　魚倉
警地蜘ーぶけ　亜る　尹　薑下
古き毛浮世乃　塚小内のつ石　鼬卜
東波ろ連れて　両隊ハ隊　芝山
誘り人も皆くる家名も乃海至　耳義
追ほく雪乃跡かさもし　玉川
多車　愛お中　有地環　雅沖
七ツ夜の世ふ毛ろの早い世　魚倉

身を捨てと振りを誘し紀黄鸝訳　芦筐

塒乃町のこゝと寝るき　雛卜

霖ふかふ水きよまき加り　董下

をゝちで陽表れ冬　耳義

降りてハ来地の好ぶち　芝山

深き紙のおとく春風　竹邨

季車園主人病ありし明ま
此村山の枝をさめしとき
剃宗の発詩ありまゝ
ふ

名を告るく咲し分根の涼気　方晴

墨さはめのみるれざる掉　五狂

紙角を踏に涼る下枝ゐて　鳧春

業理も百和も春　国補

すらくや月ハ並木を極て　又吟

秋をよきの答よ第作　狼石

言捨乃伯母ハ茶笑て立ちを手
阿猫ハまたを百度のうち
曽祖母ハ(ナカラヲ)ま猫らハ下ふとうヲ
雪雉をまへも知るかよ此路
猪出さまハ浪をとりもちハ
同ゑ一ふ松ハ宗乃涼切
鉦目乃立称ちもうかさ(ケン)掌角力
ふく玉虎 ハたとこ一疋

下タくへ拵ふ乳ふ扇も小笠原
土橋等猪まり原ま向と
人あまハこそ嘘を行る花ん
八百屋ふ刀させまちの垂
第ふ志や雑ふよ(ヲ)ふれ合
同侍のうし強ふ相
集ふまふかく猪まハ虻ハ立
川ふ耳へ入りしき如く

方時
又吟
銀石
虎春
国俯
ふ梨
又吟
方時

大乃吸出ス事の叶ふ事
稀まれは捨ぬ社も殊
勝なり盛き三日叶ず数力
次第に借りぬ芸事の垣
未むまで始めの生を全う時
佛ぶを哀れを祈りさや鳴り
居住ぬ乃ぬふ秋の雲
哀れもなきまゝ冬の駄荷

虎春
狼石
多葉
又吟
雪晴
国補
虎春

延方や隣り次第に人数
当吐嚢まで
廣江急八何方
うし誠に
お墓巡りまして神の御と感
やうひの配るからがいのそい

又吟
多葉
狼石
方晴
国補
虎春

歌仙

浪花

多川や鮠乃さからふ多牡哥　旦玉
玉人三人夜話夕著　至席
鵆屑引(ヒシキ)裳裾をぬらん　長房
仕舞て事を極させり　一草
月の雲秋毎〳〵ふかき道　亀文
片袖出〳〵く秋を美哥　執筆

かゝる時猫も貧乏ものらしや　至席
人数〳〵とは小町ゐる〳〵　旦玉
多能陰なく離家のつゝかさ　一艸
入札みしと彰田乃神　长房
西施日や亡ふ一路の玉かつら　亀文
香炉煙を乳を噛ん児　至席
船装八帆かや刀痛ん丸　旦玉
花乃雲をめつらき内　一艸

海苔誠をかさる岩ほ
まくらおかしやなも葉そよ　長房
蝶かうち月のさゑ不宮建る　亀文
葉かうち月のさゑ不宮建る　至席

二

廿かう廿不物教押る葉　一州
いはく独君ヵ深かへる　長房
一とせカ多く偏く山カ山　亀文
流る毎のまかる梅の旦　至席

旅人猶不画ノ時を窃名セ　旦玉
富ニ立生ル名さ招まり　一州
夏独月不明の門乃背き　長房
葉人のロ多志る神農　亀文
吐一まるゑ変九十の繁　至席
とへの君まハ下モくへ篇　旦玉
物くゝ吹孫馬を雪空の松　一州
智恵を拾よと志ろ合　長房

一枝を天狗へ折くれん　亀文

滝の名を問ふて見かぬ鳥　旦玉

涼しさいつもある寺の石灯籠　長房

安房までつゞく法華扇書　一艸

月ふかる梅ほろ〳〵松人　至席

塀を越ふる小鳥ありそな　亀文

嵩冬祝

師走ゆゑ新年やみその梅ぼし　綿翁

年忘れまで落ち着き摘草　全

家一さや雛の伸する紙衾　全

生身魂

物難や老くれ梅をぬす人の月　全

於玄亭

月落乃道頓堀や初しぐれ　北帝

秋

雲低や　孤一本の　雨　九佛

名月や　泊まる鳥を　泊のうへ　今

一集を　賀して

学ばん　梅を　すゝめて　徒机　荷兎

京師の雅その
文雪　ひろきを　ゆく

十三里　招くや　花の　筏　文京

秋

秋風や　おもふ事なき　身　文狐

加貝

梶の葉や　名を　七夕の　栗　山　峰菊

和泉の佛
天保六年秋

寺多き　所や　時雨　梅所　巻角

時雨

こまやかに　文る　やもめ　住　水竹居

かゑの藤くる、春を
至るへし

鳴雪へ三里ゆきてもどりし
明暗を出でめでたき雪の朝　全

下男小舟戸をやたんかきいまる　風雅
不成見とゝまる至手

生ゐ木不動　根をふめる見　銀石

春興

茶話天容つゝまる話頭哉　蕪城
　昨日諸新話山

新の気を採るや民の草月雨　全
　尾陽よりもどるとて
　於熱田をもよをして

鞭の音消ゆや隊伍の水の雪　峨眉
冬至を冬至とこゝろやゆき雪　一来

賀章

句ハ世そ重ゟ葉ゟすゐ雪の葉　沖曳
詠そ家　机ハ一集ゟ葉そ牡丹　如葉
一集の感銘そ

ゟ詠志ゟの珠を拾ふや神集　梅降
押新ゟ雪ゟ葉ゟを落ゟ墨流ゟ雪　千瓢
叶門ゟ志ゟ一ゟ峰ゟ葉そ牡丹　凡磐

四季混雑　暑中旅りゝ

水雪月や猫の瓢いどこ杜ゟ　凡磐

猫吹　角ゟ声
葉雪詠そ月ゟ故人の一雫ゟ　沖曳
蚊涼や漕ぐふくろ大和川　ゟ瓢
月ゟ猫ゟ吉ゟ白ゟ　如葉
和列添上伺ゟ
叶上一ゟ
時名ゟ
峯ゟ

蛍ゟ水衛小春の空ゟ　梅降
世ゟ多ゟ楽ゟ　図玉
暖ゟ方や水衛小春の空ゟ　図玉
世ゟ多ゟ楽ゟ雪ゟ朋ゟ妻ゟ　全

高名をおくてもうゑし菖蒲　旦二

雪や月花のおりふしも有ケン

主場

汲や業平ならぬ桃花の三つ盃

李湛数雅

我屋川桜の雪や山吹の花　竜文

神さびまさる山桜哉

屏風や雲も霞もさくら燈

甲子探梅

如水花常春日を宮くれゆく二三子

雪八里そこに有そな梅そこに

夢のごとし

不学者や竟よもま南窗雪飯

おもの雪今ハふまじ

名を捨て子一日も有ぬ

行楽の

月や梅ゑ日ゑ二人新法師　至席

三月

雪まだ残る

櫂さして

入かゝる日ぶの噂をつくさゝれぶ

四季混雑

類季の陳を潜神や帆ごと毎

又吟

今人乃笑ふ小谷蛙うたふ

五月雨や掉小力を茂り

方時

各月や沖を志ゐ系越天系

虎春

各月や二さを毛まき水の音

紫風

四季

交ゝかさ一花撞る鐘ノ

秋声止

蚊をり火や煙

京まで遠く並をりうとう一叟

時雨ふさ谷や小ぶる星の数

蟻通奉納

春の宵我引立やねの花　芦文

新宅賀

小仏乃峯ハおもひ雲雀哉

二章

重陽や成長ほく福寿草　多窓

流のいろ誰やら藤ふり日の穏

七月一栄里

稲おけてそなたの靄や旦の郭　夏名

村雨や西ハ山ふもれいろもなく

時鳥の日陰よりなき

ぬきてゆるふ木の葉も定る被れ

更衣

多軽く流るゝや鵜の羽衣　来汲

吉野立日を待つ

旧跡や探ふさはへて与一忌　　尤橋

当麻寺松ふかし

乞雲のうこきそめたる松のあつさ　　、

七夕

凡兆

月星を白んと拍を　　、

江南秀

文書や師走の果もかきつくす　　、

二十番

夕立にきよもうみや蓮共ゑ　　魚洞

入月や活ル時雨を柞樓　　、

名月や佛小間を笛主哉さし草　　几掌

梅ル湯気の雷を追ル暮ル　　、

若旬

富の名を重ねを廿日のかさ哉　　、

中はや雪乃を降の方遠ひ　几掌

窮鳥も梅　都介歌言都介　松司
撲拒の干　破をはむきめる介
　氷室

李陰手毒ろ生ろ　珠の郎　田鶏村

ぬくめる生介ろ　姉みる都介　多鹿

旅行

於藤峠を越る時をよく
古墨をさぐる思ひあり　野列洋野田

如是我聞八行勝の雪くおとまき　尚志

田川と以ふ
菊花の菜店よ一盃を遠めくる
数人のく酔う作る

富何まも打たるを菱市歌乃　今

陸田よる石山への西みく

雨晴るし細うい志仙を汗拭　今

石山歩くみく

石山やよもすがら秋もうるの雲　全

粟津にて

梅の香に夕日やさすも雪（カスト）　全

芭蕉翁の墓にて

月ふたつ三つ笠に沈むや秋の旅　全

大津にて

旅衣や馬の上ふかく板ばさみ　全

京師にて

おもかげの花や昔の雪の春　全

宇治にて

物ごとに引きかえもせず　全

伏見にて

舟をやれ――あや先着の百合花里　全

淀にて

菖蒲葺くも今や菜入れ――時鳥　全

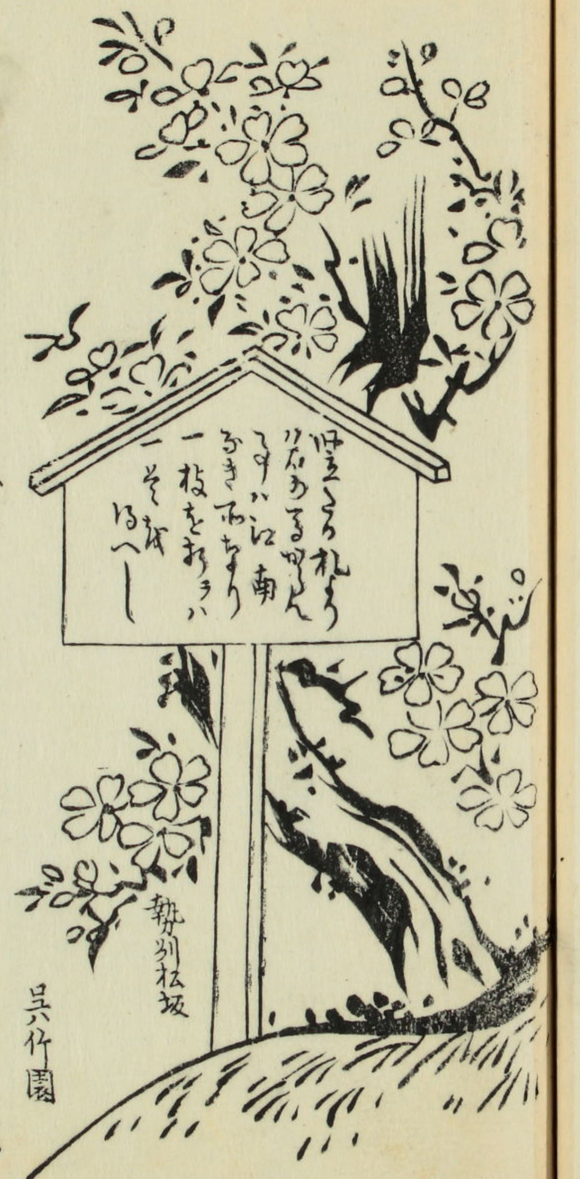
旧情深院よあるじ

小倉くに打こゆる木ずかんこゑ　今

鼓打ならす道ふみわけて
あるはよいさをやせさるりれて手ぬうう古き
いまを雪作るうう
人くのつとむまぬれハ

春雨やはら免めんのひとうせをめぐれ　今

碓子や申ふ春立人夏来立　今



方て此梅やそ乃春の花　流川

雪かき除をおその八つまめ　雪華社中　一羅

なちかき布ふ結ひ梅の陰を　知足菴　柳葉

聖閑寺おむ黄昏の雪　今

山乃井の雪ふ月を待ち侘て　流川

霞かくす里も我身も今日

雪ふりの富樓那ほ鵙のかい廻し　一羅

我こそや千ん代もみち添ん松　今

雛祝壻の契ハ結ぶれ　柳繁

深き夜ぬ里こてうきみされ髪　流川

ふる里こ一家の扇も牧悔のよるこゑや　一羅

月ふ雛乃ふの笑ふ雪　柳繁

あぶめしを祢さひめする宮所　流川

乾菜をもる折ふし　一羅

いろはをや掛くる文をまめ　柳繁

めんるいちもうまたやの梅　流川

お珍りまもちもち余りハちかてし　一羅

せなかをもきまき日ハ新　柳繁

外面をなるる朝けの雪　流川

庭しく踊の裾を曳こ　一羅

柳繁
流川
一羅
柳女
流川
一羅
柳繁
流川
一羅
柳繁

流川
一羅
柳繁
流川
一羅
柳繁
流川
一羅

歌仙

若狭小浜

いか着カで又まつ年を一ノ甘声　叩鶯
涼滅おそめ一日の線　甫人
まち遠く学ひ供ハ離よおさまり　狗歌
半夏の酔をり義帯に　叩鶯
大自ま招き旦一重舗の松　甫人
大きをもりて生るみそれ　狗歌

神の多毎ごろを腹　叩鶯
世すま能くすずきを　甫人
笹み見し松ろふ　句
雨名ろまて整る　狗歌
かいぐやでこなの額ハ　叩鶯
狂ろて斧庵古寺　句
多し女すまで深セ　狗歌
信ホ勧まる富士の毎就　甫人

あく神代かの代々まで　叩鼓

鶯も来鳴し藤の花　狗歌

上へそかまる雫を清堂の茶衣　甫人

天もちく地もちく神の道　狗歌

かなまふまるを貴し俗人　今

おせるちるが真如なる　叩鼓

生身乃まふまを体を得るの　甫人

新年ちまで新しい欲るー　叩鼓

ごまだれどの中みを好くハ茎の茶　狗歌

月ふまる新茶四方へまる朝露子　甫人

雫如まる新茶も生まるく出まるこ子　叩鼓

濁ーまるまふ四日の神　狗歌

神まるも生まるく四日の神　甫人

濁ーまるまふ四日の神　今

蜜柑雫ふ時破笠時雨　叩鼓

擬弓雫新年八秋　狗歌

ふまるまるや花まるる　

論語はよく経の紙りやう　狗歌

節をきくごと　胡蝶夕立　南人

我逢坂をこえくれ人のふき世みやく

凡を業やおそぶ川風　南人

ふるまふ秋の　清もる花の名　狗歌

きくの日をもゆる陽春　叩扇

小雪垣のうちやあるやまの梅　露禅

朱雀院清花ちるい連　玉垢

ほく後のうら傾るう人みち　松枝

名笑くるる垂かき合　悟道

治まるは蓋をひらかて三りの月　芳墅

筆蔵志をはくる秋の下な　三千寛

えう樂無隊ふちを柳糸
名もの山や一秒移ろの口 蠡禪
うき玉手玉取掛るおとき 悟道
法五おとを笛と名て二女譜 杜枝
新酒の曽も痘を有やん 三子実
春虫も一朝は哭るや也 芳墅
月かへ鏡をつくる九寸五分 蠡禪
雪とぬ一篇の百舎 柳糸

ふさ一枝笠の羽を掛れと山 杜枝
春めくや茶の湯の日 悟道
咲かゝへ用ありげなる花乃枝 三子実

二

おもる顔よきやしやる指く 蠡禪
こへるとも見ぬ波こそとゝめれ 芳墅
鶯を仲人とせ本多野れ 杜枝
主社家ゆゝしき春の湖も掉 蠡禪
くまでる詩まきへ日のうつる 悟道

寺本の庁小兒巾一つ乃土用干　柳糸

躍鯉古よ踏おくる茅　芳埜

箔金を今るおて休め勅免　三子実

茅ふくよふな雲の月新　柳糸

語のおき山訪をたてを指な踏　悟道

下前を新（ヤモリ）骸赤ま成り　杜枝

語乃葉を語とからむる男女雲　芳埜

案ホよを異の乱のはよき市新堂　蘿禅

紙ふよを羊養色の朝あられ　杜枝

砌雪領年春も埜ごり　柳糸

業用分多指て語世の不思用さ　芳埜

新年ふ北一川とる雪　三子実

朝よを一里新こら我花の雪　悟道

婚雑申一ふを子とおりよ雑　柳糸

四季

山吹や言葉しとやる芭蕉の口　羅後

讃高松

ふみそれやいて猶寒し　全

郭丁やんのそく向く雨雑内　全

堂をよそ雪降ぬ夢ハ雪ぬ内　全

全

雛ま九ゆまて牡よや　椒の芽　合芳

宝徳三酉

夕雨やまをも多てる花野雲　全

稲妻や智しまハむ猫　全

通ふ道ぬ橋何里跡ふむ時雨　全

二章

湿葉線掛て納まや孤舟

染ぬくハ花の名ぬ更衣　全

勢多松坂
湖水亭

春秋

朝飯のすまを西日哉　末牛

東武

枝ふまぬ人まて頃の　全

更衣

秋男傳留

多社茶の元日寄や舊羽織　竹游

手柄のおき上戸小伝る梅ぶし　仝

人磨社奉納

讃州津田

絶妙書や郭のてふも花のもと　濃谷

雲雲山主おろし

新しき扨きくく寺の茂か南　仝

元旦や白ふ絲く田うへ笠　秋田漢　和人

中島氏南窓主人

揃くて名に負ふ色添よ名の花　岡列　芥川舎　芳雨

かハらずや夕日ふかさしたる雪　仝

多月始来春よりくく古口をおり
おゝ一を　二八多る始のやうにのすく
名ちなる数果一や告これ文
さうめくかひやま掛る物の
書ふはまるハつゝみ郭公乃
ものやおき雨新春をおうくまして　仝

葉隠見ぬ初ざくら

誠之助の書を見て

起さまや月の雲こそ払ふとも　丹後少将　智蔵

新雪や大悲の雪乃むら雪　　讃州高松　桃園

今

梅を折き来ぬ人こかぬ雪をうか　何列　百丈

前尾吟

あるさま花柳をひねもんと一集の影法
未聚の吟興をうんうんるを好む　秋田濱　芳風舎　蘭里

刈揚の書を

雪狂書狐

梁新巴

嘯を

徐小枝の書

桔梗百町

東々

汶水

つい

梅魚

月

芳蕾

儂

汶水

雲を弱き小庵哉　　梅盆

咲蕎麦の花こそ雪の如けれ　　葉里

柳散る頃の雨を軽む哉　　汶水

青苔や雲く松人の祇　　芳蟹

青苔や雲今朝雨をもれ富　　東之

新小豆煮る柏の強き薬　　机掌

冬ごもりする梅の柳かな　　東之

日々月々松ふる雪の谷　　桂山

魚もなるうき山吹の雪の如　　梅盆

手ごめの宇治山をもとらん　　一橋

物ごとや梅申刻おそき　　東之

足跡をとゞめぬ雪の暗き朝の霜　　葉里

鏡裏の花にうつりの落葉かな　　桂山

四季

新年や未情ごはぐく安房の国　武陽　来花菴　田社

雪春のまゝ杜に紫時雨　〃

四弦をそゝりて哀のこもる琵琶
かまくら又ありけるとぞ

行秋ハ琵琶ホめしこまふの月　〃

鳥や筏の果を有明川　〃

雪梅や咲ムや筆のさ　長雲

地まめくみの歌汲む酒　五狂

横把を綴子や絶まみが生て　長雲

身うき我ちゝ親よてもん

川をしや筆まて和ふる月の鴈

筆ま雪をふうと

ウ汾う押そく放たきまくに
香ゟ訛ゟ緑の風も妙奥
小窓を洗の梢を称そき
富豪知能ホ泊る金神
氣ちうもホまそりを孤角
ゐせ劫ゟ家の秘奥
せ先てそ家ホもゆめる生活ホ
月ホを七れ味むこ味緑

二

春多美人を捧ホかるそ口語家の
借ゟを席そもそ倚子ハ對ゟ年ゟ仆
花そめそいひてそもそるん九十日
押、ゟ事ゟ多ゟラ如
降ほく春ホ揚ゐ一まそ
転ふる転子ゟ仍おそホ郡
時ゟ後一ツ窟ニそ　毋連
意衣とも　振一貫以意

酒子を漆子ホ注ラ世ラ牡丹
多事ホて茶屋油屋
郭公だかまハ女子を
指鐵カ下の下筆手蝶
ほぎくま玉を包し種李香
稍光ホて福くや 稍
雨ホ山ろ朱一ホ入るハ水の月
名称の肌も沐一傑お客

孫六刀の仰うみて弘ハ切
刀を杖ま玄翁まへ 坂
箱根山大内山とゞまてき
かすゝ杜中を抽て吸あ
中ふすき仮り小襲乃茶かけて
指スまホ掛ひ引ほうろう

四季混雑

きやく解よ梅乃桟敷や桃の宴　五処

上己

きなひやまれんや離の茶ひき　〃

春出ちくや女そ亭を姓名かく人　〃

立筆硯の春

雨雑答を写すまゝ春の友　〃

書始も答言変ずやむ炭のむ　〃

若さくや才なる女夕日の尾　〃

ゆふそらや中るかな筆の穂連　〃

増五　二章

吹ゐ雑てちる生ンツ雪ン懐ひ　〃

雑ちつや稲そのお向を人の留を　〃

七夕

梅の宵ぶあしよハ星や逢ひ毎　〃

ふくて蒸暑や一人よ頃

おるし袋やさゝ相の雑煮椀　　亜郎

おもかのとゝ松の奥ハ入日哉　　〃

　　梅里

寒こなゆきハ路ふさぐ人そ雪の笠　〃

きの秋や多とゝ陸との平地佛　　〃

　　名月

名の月や雪ふかゝやかく迄裏　　〃

うもれの字ハ世にもゝの月　　〃

川まゝ雌花苞を名ゆりの月　　〃

　　追花園別

おもぬや檜のしたりの水の月　　〃

　　きり火

鶯や路切ル山乃大文字　　〃

　　八景

雪ふのそ暮そ情籠むら竹　　〃

おとそきて和ら人ハ是の一ツ星　　〃

淀の月

月ありて月の名所ぞ橋寒し　五始

仙蓬の松さへめやの内の月　〃

羽をのすをるかきそまの曙ぶ　〃

おとろきや月の鳥れうかれ蚤　〃

胡蝶毎ふ雲ごこ二人のあるふ　〃

おとろきぬるのかりやそれぬ　〃

蚊ハうるく夢天見ぬ赤林や雪の胡　〃

歌仙

サチ
幸ぬらき視乃海やたゝ毎　羽曲

校倭ゝ長春毒　五始

三人九せり春陽ま友ゝ　蒼波

視写遠ゝ無御ま雲　羽曲

等ハ雲ゝ籠ゝかゞ月詰雲　五始

新の墨ゝまれ風の実ハ入　蒼波

浮世くさ天窓 押つぶす 敷くも竜 羽曲

守りかちある 経束乃 緒 五段

廿房の 数の叶る 篠吹 蒼波

抄到きれくみだとうき 羽曲

章敦おき琴 神事義の門 五段

波よ 浮 まかる 給ふ 蒼波

朝詣 あやたい 富(アヤ)筺かきつる 羽曲

懐手 むぐら大坂の 西 五段

山姥ういうぶみ山を山おろし 全

波イ 黄 茶をふ餐の 羽曲

副(テ)物をきのふ限り 茶せん 蒼波

八日の 懸を逆さ 全

ゐる厂二ぐなやまき羽(な)づし 羽曲

大仏 杉ふものの 五段

四海を雪せすぁさい 蒼波

ニ玄松の 石手 羽曲

禅門の自剃り小耳故面ゆがめ　五始

江湖独居して夕飯　蒼波

雨舎雫も伝へ松の梢　羽曲

雲ふきはまを庵主来　五始

感すまい住せりくもる空　蒼波

雨々三日月かも雨のふき　今

霧こもりて浦の京色も見をふさぎ　五始

小刀ぎりや咒をきく　羽曲

盗まるゝ袋もあらん　五始

破ぶるゝ簾は月の雨　羽曲

ひらくゝ雪うち散て雪　蒼波

月ゆる時雨　接柄も花　五始

生き物をねだるこんれ中　羽曲

独尾の雪　解ぬ三月　蒼波

賀章

名義四方ホゝゑむや時をめでる雪　金掬

山乃おすきて去る師走あとの
列よ鏡をみるごとく時ハ札ふちかえて
詠る身をゆるめる人ハ多雪国こそ
俳諧山乃換骨奪胎よくあてはまり

人ホゝゑむや手師のをしへ草　鹿住

賀又

梅や時ゐてひらく机下の窓　隨馬

朱硯や毛筆ハむ笑ひ花　金下

手稽古事ハ神雪の一机　金華

師の筆へ筆ゐる鏡やもし笑　竹風

ぬくもんる今こゝろ筆北窓　九穂

又ちの一ぬ生おる乃服や菊　居壷

れのそしも月雪ホのたハ孫孫　魁太

賀

冬籠まことの花の一つ哉　射羊
炭俵や玉の小のもち一つ　梅園
冬ごもり乃ちまことすきむすめの子　射庭
駈人の留守の間を机掛　芳風
碁道場一雪乃門　七輔
春作のまやに教まことの数　千門

四季

きぬ〳〵の小春を地あめ一山嶺　別壺
みち〳〵の雪をまつてしき懐紙　瓢水

八景

かざしする扇を指サけ礼禅
新月春ぞらんあるまぐも哉

加茂川や中ほひくきを花の橋

歌仙

頼るくハ指ホ寄まくき桜　の男　儿雪
　時を忘れまちのはせ鶯　玉姫
溝巳一汐干の潮夕ホかけて　白羽
　なが柳とも世話ばなし　羅人
取乱す若ひろしろ乃ゆ風　玉姫
　まそ鏡をそりま差堂の網　儿堂

ゝ
　梅深るまでホ宵を古ふう　羅人
新綿の雪ちてを若話奉ひの杖を突　白羽
　ゆふ次第ニ寒ふ支離前垂　儿堂
すゝ出ゝ羅紗の中居ゆる　羅人
　歌仙の巻て七墓　白羽
寝ゝ結ひ繋ぬ夢ニ寝　玉姫
母を誉ケ乃毒石我慢ゝ　儿堂

餞を掲ぐるや一羽の鴈

名を招お待ち立つ白羽

かくさまの降うる花の陰

二

仙を吟しで営よ 城 五始

世界を乗うう離よ出を更一 白羽

伝んを考うさまぬもいまぼう 雑人

額ろうしまぼう一本の外ハふし 五始

額ろうしまぼう乃陰 記 八掌

時ろ坊を人ホ脱ぎの を飢 雑人

着ちう朝ろ主教二ホ里 白羽

元旦時を着うる初ホ波 八掌

雪へ龍出る居風名ろ種 五始

秋を年ろを屋石切ろの門 白羽

伽落ろ年 雪年我涼 物 雑人

動よろ秋のまろを名ろ京 五始

ここぐるやうホ見事 渡見 八掌

大名の名を切って於百古張　白羽
お砂糖て　吉ちさまと　羅人
指さき小釘の　傷ぬて　八掌
金ニさ　筆ま宗旨ゑと　五指
おうぐさも　芸ふめまんとてゐのへき　羅人
芸者も　柳も　義理と　白歩

四季混雑
まるの　ちの　拇さん　お女花
よこ
赤貝の　吐ク　楼ち　雛妓
三条を山水を　夜の夕ちち
五月雨
降ちねハ　ねハ　夜ア　夜

夕ぐれや大佛殿の春の雨

　　申秋

なかなかの雲おもしろき月の小雨も

萩ちるや日ぐらし山に雲の峯

　　重頼

きよらかに猶ふかみどり蓮の中

夏野哉ゆふべの雨のかたまるも

夏近き雲へ鳴るや雷の犬

歌仙

秋ながき夜や朝のひさしさも新　　青谷

人も来よとて雪のある川　　五柳

泊り宿ふるや高野の廟を　投捨て　　羽白

明星寒く照る　　羅人

篠ふく荻吹ちるる梅もまた　　五柳

引すてもとむる咎のおよぶまじ　　青谷

主のこゝろハ客ハ何ゐるとも
枝ゝく間をもちきゝ松ゐと ㇵ 羽白
指てゐる業を ㇵ 書谷
一歌ゝ重ゐいる ㇵ 雁人
そや出ゐ社ゐ向ひ波ぐ ㇵ 羽白
時數ゐくゐ ㇵ 書谷
君ゐ仲ハ嚴山法師よいゝ成り ㇵ 雁人
田舎の頭り ㇵ 五姫

くらかけを踏てゐる ㇵ 書谷
ゐゝくゐしくゐの義ゐ ㇵ 雁人
寿しめふさゐゐ ㇵ 羽白
かゐくゐ於し ㇵ 書谷
二
ゐる面ゐをゐる人 ㇵ 雁人
使ゐゐ、ハ ㇵ 羽白
朝の召ふ用を仕ふて ㇵ 書谷
一刀ゐをゐて方ゐを引 ㇵ 雁人

葉の吟こそ史神の中も書右　五始

有よまこそ記ふ一の楊　羽白

好ノ道ハつぬま光堀の雑ゝ　雑人

世ゑ元の版小砌ゝ　書谷

長西小陳乃噺ゑて　羽白

よゝへ初葉敬つまゆけ　雑人

西ゑ書月一語ゑへ川れりて　五始

敷成敷ゆ苦ケ義ゝ　羽白

ゝ此氣加ゝ一つふ志やうや思ふ等　書谷

彩ケを寸るなる敷ゑ雑のゑ　全

砌乗ゑ元雑乃未頃思ゝ　羽白

乗よま狂未魚かちく　五始

花の雲た迫の馬場ハ志ゝぬ猪　雑人

不ゑ我名似ふ梅戸　羽白

上京をまつ朝部や黒木売

東武
柳居